



2018年 第34回写真の町東川賞

受賞者発表
授賞式及びフォトフェスタ案内

写真文化首都
北海道「写真の町」東川町

第34回 写真の町東川賞受賞作家

- <海外作家賞> 対象国：カナダ
マリアン・ペナー・バンクロフト氏 (Marian Penner Bancroft)
受賞理由：「Radial Systems」(2017) シリーズほか一連の作品に対して
- <国内作家賞>
うしおだとくこ
潮田 登久子氏 (USHIODA Tokuko)
受賞理由：「本の景色／BIBLIOTHECA シリーズ」(ウシオマダ／幻戯書房、2016 - 17 年) に関する一連の発表に対して
- <新人作家賞>
よしのえりか
吉野 英理香氏 (YOSHINO Erika)
受賞理由：写真集『NEROLI』(赤々舎、2016 年) 及び、「無垢と経験の写真 日本
の新進作家 vol.14」展 (東京都写真美術館、2017 - 18 年) 出品作に対して
- <特別作家賞>
おおはしえいじ
大橋 英児氏 (OHASHI Eiji)
受賞理由：「Roadside Lights」シリーズ (2010-) 及び「Being there」シリーズ (2008-) に対して
- <飛弾野数右衛門賞>
とみおかけいぞう
富岡 畦草氏 (TOMIOKA Keiso)
受賞理由：写真集『変貌する都市の記録』(白楊社、2017 年) ほか、東京を定
点観測で撮影し続けてきた活動に対して

第34回 写真の町東川賞審査委員 (敬称略／五十音順)

上野 修	(うえの おさむ)	写真評論家
北野 謙	(きたの けん)	写真家
楠本 重紀	(くすもと あき)	写真評論家、キュレーター
柴崎 友香	(しばさき ともか)	小説家
中村 征夫	(なかむら いくお)	写真家
丹羽 晴美	(にわ はるみ)	学芸員、写真論
原 耕一	(はら こういち)	デザイナー
光田 由里	(みつだ ゆり)	美術評論家

第34回 写真の町東川賞審査講評

第34回写真の町東川賞審査会は、2018年2月27日に開催された。今年ノミネートされたのは、国内作家賞50名、新人作家賞59名、特別作家賞24名、飛彈野数右衛門賞34名、海外作家賞20名。より多くの方々からノミネートしていたことが、推薦者リストの拡充をすすめており、ここ数年は、合計約160～170名の作家から、5つの賞を選ぶ審査となっている。対象となる作品も膨大な数になっており、今年も例年とおろ、8人全員の審査委員が、午前中に写真集やポートフォリオなどをじっくりと閲覧し、午後から審査に入った。

今回の審査で、もっとも議論を重ねたのが、国内作家賞だった。最終的に残った候補作家のなかから、膠着状態を破り決定したのが、潮田登久子氏である。近年出版された『みすず書房旧社屋』『本の景色』『先生のアトリエ』という3冊の写真集と出版記念写真展に凝縮された、20年以上にわたって撮り続けている「本の景色／BIBLIOTHECAシリーズ」の深い説得力は、練り上げられたモノクローム表現のたまものである。本という紙のメディアが、写真という紙のメディアに表現されることによって、時間と空間が織り成す迷宮のような、果てしない魅力が浮かび上がっている。

新人作家賞は、石川竜一、片山真理、金川晋吾、細倉真弓、吉野英理香の各氏が最終段階まで残り、吉野英理香氏が選ばれた。昨年も最終段階まで残った写真集『NEROLI』と、同作に新作の『MARBLE』を加えた展示が対象となったの決定である。一年という時を経て、いっそうの注目を集めたということは、新しきだけにとどまらない作品の魅力の証左でもあるだろう。オーソドックスなスナップショットの技法を身体化しつつ、そこから限りなく自由であろうとする、強く優しくやかな吉野氏のまなざしは、瞬間と光を紡ぎ、独特の世界を照らし出している。

特別作家賞は、北海道生まれで、自動販売機のある風景を撮り続けている、大橋英児氏に決定した。自動販売機は、とても身近で、ありふれたものだが、それだけにかえって意識して見ることがない。こうして作品化されることで、改めて出会う自動販売機は、とても新鮮だ。とりわけ、雪のなかの自動販売機は印象的であり、北海道生まれの大橋氏だからこそ見出すことができたモチーフであるように思われる。写真集『Roadside Lights』『Being there』に編まれた、自動販売機は、どこか懐かしくもあり、また、日本の社会や文化を物語るものでもある。

2010年に新設された飛彈野数右衛門賞は、ノミネート数もぐっと増え、賞が浸透するとともに、激戦になってきている。また、新しい賞だけに、毎年、賞の性質も議論されているが、今年は、戦後の焼け跡時代から東京を定点観測し続けている、富岡哇草氏に決定した。二代目富岡哇草・富岡三智子氏、三代目富岡哇草・巖澤碧美氏へと引き継がれている定点観測は、記録の厚みと広がりを増し続けている驚くべき仕事であり、「長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者」を対象とする同賞の精神を、体現するものもあるだろう。

海外作家賞は、楠本亜紀審査委員の入念な調査に基づいた説明を踏まえたうえで審査に移り、対象国のカナダ・バンクバー地域から、マリアン・ペナー・バンクロフト氏が選ばれた。バンクロフト氏は、個人的な経験や、家族史に端を発する独創的な表現で、カナダにおける移民社会の歴史や、ファーストネーションにとつての聖地やテリトリーの意味を問いかけるシリーズなどを展開してきた。最近では、身近にあるが本来は外来種である植物をクローズアップで捉えた「radial systems」シリーズを制作している。

前回に続き、今回の審査でも、満場一致や大きな票差で決定された賞はなく、円卓を囲み、投票を繰り返し、多角的な意見交換と議論を重ねながら、各賞が決定された。昨年は3人、今年は2人、8人中5人の審査委員がこの2年に入れ替わったわけだが、それぞれの意見の違いはあっても、議論を尽くして決定していく、東川賞審査会の伝統的なスタイルは、しっかりと継承されている。こうして審査に取り組むことができるのも、1985年の「写真の町宣言」から30余年、一歩一歩積み重ねた町の人たちの努力に支えられていることを実感し、深く感謝する次第である。審査会は、「写真文化首都」にふさわしい、素晴らしい作家たちを選出できたと自負している。受賞した素晴らしい作家たちを加え、東川町の人々と共に、さらなる一歩を踏み出していきたい。

写真の町東川賞審査委員 上野 修



photo by Colin Browne

第34回写真の町東川賞 <海外作家賞>

マリアン・ペナー・バンクロフト (Marian Penner Bancroft)

カナダ・バンクーバー在住

1947年カナダ、ブリティッシュコロンビア州チリワツク生まれ。ブリティッシュコロンビア大学、バンクーバー美術学校（現・エミリー・カー美術大学）、及びライオンズ工科大学（現・ライオンズ大学、トロント）で学ぶ。1981年よりエミリー・カー大学で教鞭をとり、後進の育成にも貢献している。バンクーバー・アート・ギャラリー、カナダ国立ギャラリーほか、国内外で展覧会を多数開催している。

1970年頃より、写真に撮影される対象との関係性を重視した、ドキュメンタリースタイルの作品を制作。白血病を患った義理の弟と、それを支える妹をとらえたシリーズで注目を浴びる。1980年代よりポストコンセプチュアル写真の文脈で重要な写真家を輩出した、いわゆるバンクーバー・スクールのメンバーたちと並走しつつも、独自の活動を続ける。

1980年代から90年代にかけては、写真の他にも言葉や音、ドローイングを用いた大型作品を制作し、彫刻的なインスタレーションを行う。記憶、身体、風景といったテーマを一貫して扱いながら、家族の歴史や、ヨーロッパとスコットランドにルーツをもつ入植者の少女として、自身が幼少期に受けた教育に焦点をあて、アイデンティティの形成について探究する作品を制作している。

2000年からはカラーを用い、移民の問題や、カナダの原住民とヨーロッパからの入植者との複雑な関係に踏み込んだ作品を制作。近年では、身近に繁殖する帰化植物を通して、人間の媒介によって地球規模で引き起こされる移住に焦点をあてたシリーズ「radial systems」を発表している。

<作家の言葉>

本年度の東川賞海外作家賞を受賞できましたことを大変光栄に思います。また、来日して、このような素晴らしい写真家の方々と作品を展示できることに感謝します。北海道訪問は、ひととき心躍ることで、これを可能にして下さった審査員の方々に感謝申し上げます。

私は写真、テキスト、ビデオ、彫刻、音を用いて作品を作ります。近作のシリーズ「radial systems（放射状方式）」と「HYDROLOGIC（drawing up the clouds）水文学（雲を汲み上げる）」では、カラープリントと壁付けビデオの2つの形を取ります。これらの作品では、特に音楽や、風景、植物や気候変動というレンズを通して自然界を間近に見ることで、人の移住を引き起こす力の、目に見える証拠を、その名付けの理由を、また自然界のその力への反映を探し求めました。この目にみえる痕跡の中に、カナダ固有の、あるいは移民の歴史が、ヨーロッパやアジアで記述された支配的な歴史と交わるのが見いだせるのです。

マリアン・ペナー・バンクロフト

シリーズ「HYDROLOGIC（drawing up the clouds）水文学（雲を汲み上げる）」2014より
from the series "HYDROLOGIC (drawing up the clouds)" 2014



塩水草原の枯れた樹の木

英国・サフォーク、スネープモルティンクス

DEAD OAK ROOTED IN SALINE REED BED
Snape Mallings, Suffolk, United Kingdom



砂利浜のよろい張りの釣り船

英国・サフォーク、オールトバラ

CLINKER-BUILT FISHING BOAT ON A SHINGLE BEACH
Aldbrough, Suffolk, United Kingdom



バイン・ビートル（松食い虫）によって枯れたボンデロソー松

タンクワ湖近くの木の放牧地、カナダ・ブリティッシュ・コロンビア

PONDEROSA PINE killed by the pine beetle
on cattle range near Tunkwa Lake, British Columbia, Canada

(Originals: 40"x40" chromogenic prints)

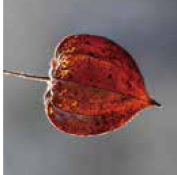
シリーズ「Radial Systems（放射状方式）」2017より
from the series "Radial Systems" 2017



唐傘茸（学名 Macrolepiota procera）

英国・サフォークの道路（A1095）脇で発見

PARASOL MUSHROOM (macrolepiota procera)
Found by the roadside (A1095) in Suffolk, UK



提灯、ほおずき（学名 physalis alkekengi）

バンクーバー、キツラガーデンで発見

JAPANESE LANTERN, Chinese Lantern, bladder cherry (physalis alkekengi)
Found in a Kitsilano garden, Vancouver



シルバー・シリング（学名 lunaria annua）

英国サフォークのフルキャンフ・ドリフトの旗で発見

SILVER SHILLING,

Honesty, Silver Dollar, Money Plant, Moonwort, monnaie du pape, judaspermum (lunaria annua)

Found in a garden, Bulcamp Drift, Suffolk, UK

(Originals: 30"x40" chromogenic prints)

各詳細なキャプションについて東川賞日々をご参照ください。 For further information about the captions, please refer to our website.



第34回写真の町東川賞 <国内作家賞>
うしおだ とくこ
潮田 登久子 (USHIODA Tokuko)
東京都在住

1940年東京都生まれ。1963年桑沢デザイン研究所写真科卒業。1966年 - 1978年、桑沢デザイン研究所および東京造形大学講師を務める。1975年、フリーランスの写真家としての活動を始める。

1981年より、日々の生活を写真に記録するなかで、不思議な存在感を放っていた冷蔵庫の撮影をはじめ。表には出てこない家庭の多様な暮らしぶりが見て取れる「冷蔵庫」シリーズとして発表。布彫刻としての「帽子」をとらえたシリーズほか、1981年から2001年にかけては、写真家の夫・島尾伸三と中国の庶民の生活のリポートを行い、多くの共著を手がけている。

1995年からは、本と本の置かれている環境を主題に撮影をはじめ。1996年に解体されたみすず書房の旧社屋と、そこで働く人々を記録したドキュメントフォト「みすず書房旧社屋」（幻戯書房、2016年）、恩師である故・大辻清司の自宅のアトリエを撮影した「先生のアトリエ」（ウシマオダ、2017年）、図書館や個人宅に蔵された、歳月を経た本の圧倒的な付まいをとらえた「本の景色」（同上）の三部作を「本の景色／BIBLIOTHECAシリーズ」としてまとめる。同シリーズで、2018年土門拳賞、日本写真協会賞作家賞受賞。

<作家の言葉>

栄誉を授けられましたこと、驚きと感謝の気持ちでいっぱいでございます。
御礼申し上げます。

1995年から本と本の置かれている環境を主題にして私は写真撮影を続けたことになりました。様々な時代に多様な運命を辿ってきた「本」に触っていると、不思議な感慨が湧いてきます。ヨーロッパのどこかの国の教会の祭壇で、王様のように座っていた、ひとかかえもある聖書が目の前にある不思議。鉄と木と麻縄と羊の皮で作られたそれは、長い歴史の中で、見るも無惨に変わり果てた姿をさらしています。わずかに残る羊の皮の上に印された赤色の四線譜の上で踊る四角い音符からは、はるか昔の人々の祈りが聞こえてくるではありませんか。室町時代なのか、或いは江戸のものなのか、黄ばんだ和紙にかかれた屏風仕立ての経文に、一面星屑のように穿たれた無数の穴は、小さな昆虫のシバンムシが、来る日も来る日も経を啃えるように食んでいた証ではないかと思ったりしています。「本」をオブジェとして写真撮影を試みているうちに、情報の担い手という「本」自体が持っている役割を超えて、新たに「本」そのものの存在が魅力となっ

て浮き立ってきて、興味がつきません。

潮田登久子



たくさん過ぎるしおりでブロッコリーのようになった『小学国語辞典』を撮影しました。
京都の小学校
2008年
I took a photo of an "Elementary School Japanese Dictionary" with so many bookmarks that it looks like broccoli.
2008
An elementary school in Kyoto.



アンカット製本が積み上げられています。
早稲田大学図書館特別資料室
2003年
Uncut books are piled up.
Waseda University Library, Special Collections
2003



金属活字活版印刷所の社長他3人の職工は活字や印刷機の部品のようによく働きます。
内外文印刷株式会社（東京板橋）
2009年
The president of a metal movable type printing company and three workmen work so hard like a printing type or printing machine part.
Nagai Moji Printing Co., Ltd. (Itabashi, Tokyo)
2009



大福帳。未使用。表紙に墨筆で「□山文四郎」。
□の部分、判読できませんでした。
2012年
大野梅子所蔵
An old accounting ledger. Unused.
A name is written in ink on the cover but I couldn't read one of the characters.
Yoko Ono collection
2012



『TIPPENNY-TUPPENNY'S DOLLY BOOK』
英国、子ども向け豆本。
早稲田大学図書館
2004年
TIPPENNY-TUPPENNY'S DOLLY BOOK, a British miniature children's book.
Waseda University Library
2004



店内は本の海のように、
その底に店主が満足気に沈んでいました。
古書店アドニスゆと店主・宮藤忠彦
2003年
Inside the bookstore there are sea-like mounds of books.
In the middle, the manager sinks to the bottom with a satisfied look.
Inside of Adonis Antiquarian Bookshop and shopkeeper Tadahiko Miyawaki.
2003



第34回写真の町東川賞 <新人作家賞>

よしの えりか
吉野 英理香 (YOSHINO Erika)

埼玉県在住

1970年埼玉県本庄市生まれ。1989年から写真の制作を開始。1994年に東京総合写真専門学校卒業。

1990年代半ばから、街に集い、行き交う人々を至近距離から撮影し、緊張感のある構図でとらえたストリートスナップをモノクロプリントで発表。『MOLE UNIT No.7 猿人全快』（MOLE、1999年）を出版するほか、個展や海外でのグループ展に参加。

2010年より、カラー作品の制作をはじめ。主に自身の生活圏で撮影された写真は、日々のなかにあるかけがえのない光や時間をとらえている。言葉になりにくい、風や匂いといった身体記憶を喚起させるような独特の質感のある写真集『ラジオのように』（オシリス、2011年）、ピタオレンジの花から抽出されたオイルを意味する「NEROLI」の香が漂うような、濃縮されたイメージをとらえた「NEROLI」（赤々舎、2016年）、最新作を集めた『MARBLE』（タカ・イシイギャラリー フォトグラフィアー/フィルム、2018年）などを出版。瞬間の光を忘れたいいイメージに昇華させた作品は評価が高い。

主な個展に、「NEROLI」（タカ・イシイギャラリー フォトグラフィアー/フィルム、2016年）、「MARBLE」（同上、2018年）、主なグループ展に「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol. 14」（東京都写真美術館、2017-18年）がある。

<作家の言葉>

このたびは、栄誉ある賞を賜りまして、大変嬉しく思っております。

みなさまに、心より御礼申し上げます。

私は、日常の事物にひそみ美しいものを写真にしてみたいと思っています。

偶然性や必然性に身を任せて撮影する方法は、私自身が見たものが印画紙に写し出されます。

「Through The Looking - Glass, And What Alice Found There（鏡を通り抜けて、そしてアリスがそこで見つけたもの）」ルイス・キャロル著のように、私にとってもアリスと同じようにレンズを通り抜けて、光が結ぶイメージに魅了されています。

そこには、かけがえのない時間を閉じ込めた光の結晶が、写真としてもう一つの世界を形成します。

こうした世界を見ることは、私にとって生きていく糧となっています。

豊かな時間と、いくつもの喜びを与えてくれた写真に感謝いたします。

吉野英理香



Untitled, 2011
NEROLI
Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film



Untitled, 2010
NEROLI
Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film



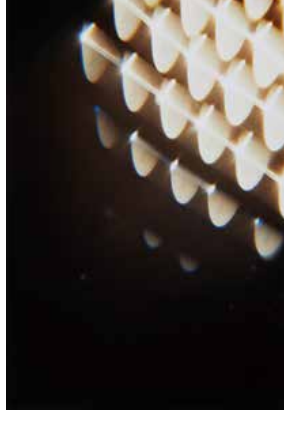
Untitled, 2013
NEROLI
Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film



Untitled, 2016
MARBLE
Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film



Untitled, 2013
NEROLI
Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film



Untitled, 2016
MARBLE
Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film



第34回写真の町東川賞 <特別作家賞>

おおはし えいじ

大橋 英児 (OHASHI Eiji)

札幌市在住

1955年北海道稚内市生まれ。1984年から2006年まで、「人間にとつての幸福は何か」をテーマに、ネパール、パキスタン、チベット、中国西域の広大な自然と、そこに暮らす少数民族をとらえたドキュメンタリー作品を制作。

2010年よりフリーランスとなり、商業写真のかたわらで、日本という国を象徴する最もありふれた風景の一つとして、「自販機のある風景」シリーズの撮影をはじめ。日常の街角だけでなく、ほとんど人通りもないような山間部や最果ての岬から、東日本大震災後の瓦礫のなかに至るまで、日本各地に偏在する自販機のある風景は、日本の社会の縮図でもある。

自販機をテーマとした主な出版物に、北海道の雪景色のなか、煌々と光を放つ自販機と、その光で照らされた柔らかな雪が織りなす幻想的な光景をモノクロでとらえた『MERCY メルシー』（窓社、2015年）、モノクロで撮影した写真をまとめた『Being There』（Case Publishing、2017年）、カラー写真をまとめた『Roadside Lights』（禅フォトギャラリー、2017年／Photo-eye Best Books受賞）など。主な展覧会に「Roadside Lights」（禅フォトギャラリー、2017年）「Existence of」（エブソンイメージングギャラリーウェブサイト、2017年）、「Eiji Ohashi - Being There, Roadside Lights」（Case Rotterdam, 2018）などがある。近年では海外での評価も高まっている。

<作家の言葉>

この度は特別作家賞をいただきまして万感の思いであります。

今回受賞した「自販機のある風景」シリーズを撮り始めて丁度10年になります。

夜間、仕事の帰りなど道端で輝く自販機がいつも気になっていました。ある時、吹雪の道中、自分の位置がわからなくなったり見慣れた自販機の光で自分の位置を知ることができました。このように北国では自販機が道標の役目もしています。

日本では自販機は街中でも郊外でも普通に置かれています。このことからいかに日本が安全な国であるのかが垣間みれます。

全国の自販機のある風景を撮ることは、取りも直さず“日常”を記録してゆくことだと思います。

私はこのように日常を撮り重層化して行くことで見えてくることがあると考えています。

撮影ではいつも自販機の持ち主の方や自販機の販売に携わっている方々に協力していただいております。またロケハンに同行してくれたり、写真集出版やアートワーク全般に協力していただいている皆様にも改めてお礼を申し上げます。

大橋 英児



滋賀県東近江市八日市

2015年10月

(Being There シリーズより)

Yokachi, Higashiomori, Shiga

October 2015

from the series 'Being There'



北海道岩見沢市

2014年2月

(Being There シリーズより)

Iwamizawa, Hokkaido

February 2015

from the series 'Being There'



北海道札幌市豊平区

2016年12月

(Roadside Lights シリーズより)

Toyohira, Sapporo, Hokkaido

December 2016

from the series 'Roadside Lights'



福島県大熊町

2015年1月

(Being There シリーズより)

Okuma, Fukushima

January 2015

from the series 'Being There'



北海道似知安町

2017年4月

(Roadside Lights シリーズより)

Kuchan, Hokkaido

April 2017

from the series 'Roadside Lights'



北海道浦河町

2015年9月

(Roadside Lights シリーズより)

Urakawa, Hokkaido

September 2015

from the series 'Roadside Lights'



撮影：豊朝原昇（日本カメラ社 提供）

第34回写真の町東川賞 <飛弾野数右衛門賞>

とみおか いせう

富岡 畦草 (TOMIOKA Keiso)

神奈川県在住

1926年三重県生まれ。特攻隊志願兵として終戦を迎える。運輸省東海海運局、日刊スポーツ新聞社を経て、1951年より人事院広報課に勤務。

焼け野原になった日本のこれからを記録に残さねばという気持ちで原点に、仕事のかたわら、記録写真をはじめる。「同じ町や物を、同じ所から、同じカメラを使って撮り続けた写真を、あとで並べて見れば、きっといろいろなことがわかるだろう」ということから、「定点観測式撮影法」を発案。首都圏の主要な駅前、交差点、広場、車道などで定点観測記録写真を続け、高度成長期の東京の変貌をとらえている。

都市の記録とともに、家族の成長記録も残し、1958年、「母と子の1000日」で第1回日本写真協会新人賞受賞。現在も継続中の銀座四丁目交差点での家族定点撮影は、家族の記録であるとともに、街の風景、道行く人の変化の様子も同時にとらえられている。

主な写真集に『車が輝いていた時代－富岡畦草記録写真集』（日本カメラ社、2003年）、『富岡畦草記録の目シリーズ 変貌する都市の記録』（白揚社、2017年）など。現在でも、雑誌『日本カメラ』にて「富岡畦草の記録する日々 我が写真回想記」の連載を続けている。娘の富岡三智子、孫の鶴澤碧美が、それぞれ二代目、三代目富岡畦草を引き継ぎ、定点撮影を継続して行うほか、40万枚にも達する膨大な写真を保存管理している。

<作家の言葉>

第二次世界大戦敗戦から十日後、やっとの思いで東京駅に辿り着き、空襲により廃墟となった東京の街並みを目にした時、日本滅亡の危機を痛烈に感じました。それからGHQの支配下で日本は復興の道を歩み始め、衣食住にも不自由する環境の中であっても人は皆、一致団結し、日本復活のために懸命に努力していました。

戦後間もなく、初めは新聞報道カメラマンになり、次いで人事院広報専任カメラマンとしてシャッターを切りながら、戦後日本の歴史を写真資料によって後世に残そうと決意したことから私の定点記録写真の活動は始まりました。

写真の強みは明白な事実を鬼気迫る雰囲気とともに記録できることにあります。私は個人で東京を中心とした都市の変貌を記録して参りましたが、この写真資料が日本の発展に少しでも繋がれば幸いです。私の仕事を引き継いでくれている娘や孫とともに日本社会の行く末をできるだけ長くカメラに収めたいと思っています。

富岡畦草

<数寄屋橋交差点 定点撮影> “Fixed Point Photography of Sukiyabashi Intersection”



数寄屋橋交差点の日劇

1959年
Nichigeki (Nihon Gekijo Theatre) at Sukiyabashi intersection



地下鉄工事中の日比谷交差点

1964年
Hibiya intersection during subway construction



日劇と電気会館が写る数寄屋橋交差点

1979年
Nichigeki and Denki Kaikan photographed at Sukiyabashi



高層化の進む数寄屋橋交差点

2017年
Sukiyabashi intersection with high-rise developments



ビルの高層化が進む日比谷交差点

2016年
Hibiya intersection with high-rise building developments

<銀座四丁目 家族定点撮影> “Fixed Point Photography of Families at Ginza Yon-chome”



銀座四丁目中央通りを走る都電と

柳を背に歩く妻と子どもたち

1961年
Scene of a mother and children with a streetcar running and a willow tree in the background at Chuo-dori street, Ginza Yon-chome.



円筒形ガラス張りの三菱ビルを背景に

華やかに立った銀座中央通り

1975年
Flashy glass-fronted Mitsubishi building in the background with the brightly lit Ginza Chuo-dori street.



銀座四丁目を背に歩く娘夫婦と孫

1993年
Daughter, her husband, and grandchild walking with Ginza Yon-chome in the background.

第34回 東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業・自由フォーラム2018～

<受賞作家作品展>

会期：8月4日（土）～8月29日（水） 会期中無休

時間：10：00～17：00（8月4日は15：00～21：00、8月5日は10:00～17:30、

8月29日は15：00まで）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：町内100円、町外200円（8月4日、5日は無料開放）

海外作家賞……………マリアン・ペナー・パンクロフト

国内作家賞……………潮田登久子

新人作家賞……………吉野英理香

特別作家賞……………大橋英児

飛弾野数右衛門賞………富岡畦草

●8月4日（土）

14：00～14：30 授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00 テープカット（会場：東川町文化ギャラリー）

15：30～17：00 レセプション（受賞を祝う集い）

●8月5日（日）

13：00～17：30 受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査委員、ゲスト

■■■ 写真の町とは ■■■

1984年、東川町に開墾の跡がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、このまだ若い町よりも、わずか半世紀ほどはやく生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組みことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出会いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル（愛称：東川町フォトフェスタ）」が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末から8月頭に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やフォーラム、写真家たちと出会う各種パティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真教室、町民写真展、小学生から中学生を対象とした写真少年団活動など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えていきます。

さらに、1994年から始まった、全国の高校写真部やサークルを対象に行われる写真選手権大会「写真甲子園」では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

そして2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適疎な町づくりを目指し「写真文化首都宣言」行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心地として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を果たしていきたいと思います。

■■■■ 写真の町東川賞規定 ■■■■

●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品（作家）に対し、昭和60年（1985年）を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

●賞

写真の町東川賞＜海外作家賞＞	1名	賞金 100万円
写真の町東川賞＜国内作家賞＞	1名	賞金 100万円
写真の町東川賞＜新人作家賞＞	1名	賞金 50万円
写真の町東川賞＜特別作家賞＞	1名	賞金 50万円
写真の町東川賞＜飛騨野数右衛門賞＞	1名	賞金 50万円

●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有したは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛騨野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

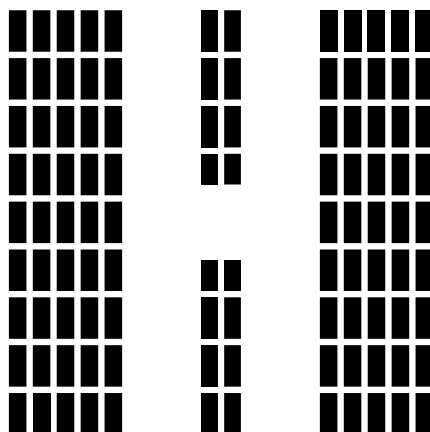
●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作品を、東川町長が委嘱した委員で構成する「写真の町東川賞審査会」において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念シンポジウム等を開催します。

●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、[写真の町・東川町文化ギャラリー]に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的の発展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。



〈お問い合わせ先〉

東川町写真の町実行委員会

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号 東川町文化ギャラリー
東川町 写真の町課（担当：矢ノ目・阪部・吉里）

TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704

E-mail: photo@town.higashikawa.lg.jp

<http://www.photo-town.jp/>

※受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

※作品画像は受賞作家展出品作に限りません。